様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１３日現在

機関番号：32601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520721
研究課題名（和文）
ムガル時代に見る現代インド企業集団の原型

研究課題名（英文）Prototype of the modern India corporate groups during the Mughal age
研究代表者
小名　康之（ONA YASUYUKI）
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：60118718

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ムガル時代の西インド、グジャラート地方の商人グループ、パールスィー商人団、ルスタム・マネクの企業形成に至る経済活動を明らかにした。17 世紀後半から 18 世紀にかけて、その企業的発展の成功は、当時の西インド経済発展に大きな影響を及ぼした。その後、今日見られるインドを代表する財閥を形成するにいたった。パールスィー商人グループのムガル時代における企業形成・発展に至る過程を実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
My research is the business activities of Rustam Manek, Parsi merchant leader in Gujarat, West India. His success in business activities from the 17 century to the 18 century made great effects on economic development in West India. Later, Parsi merchant groups made big corporates, leading companies in modern India. This research made clear making enterprise of the Parsi merchant groups seen from the European East India companies sources of the Mughal age.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：南アジア史

１．研究開始当初の背景
(1)16 世紀から 17 世紀にかけて、ムガル帝国時代の西インド、とくにグジャラート地方で

めざましい経済発展があったことが知られている。
(2)その経済発展は都市部に限られ、農村部にまで及ぶインド全体の経済発展、社会構成の変革にはつながらないとの見方が、従来の研究上では、一般的である。
(3)しかし、ムガル時代における個々のインド商人団形成の実証的研究によって、当時のインド全体への商業的発展とのつながりは否定できないことがわかってきた。
(4)本研究は、こうしたインド在来の商人集団の経済活動を研究することにより従来の通説への変更をせまるものである。
(5)従来の研究では、まだその成果は少ないが、ムガル時代のジャイナ教徒商人の経済活動についての研究がある。
(6)こうしたムガル時代の商人の活動について実証的な研究がすすむことによって、従来の、ムガル時代の商業発展が農村地帯に影響を与えることはなく港湾都市のみであった、とする通説への、修正をせまるものとなる。

２．研究の目的
(1)本研究の目的は、現代インドにおいて大きな経済的影響力を持つ集団は、パールスィー集団の財閥であり、その原型を本研究において明らかにしていくことにある。
(2)パールスィーの経済活動はムガル時代にその出発点をなしており、本研究では、現代につながるパールスィー集団の経済活動の原点を見いだすことである。
(3)本研究においては、16 世紀から 18 世紀にかけて、西インドのグジャラート地方で活動した在来のインド商人の経済活動の実態を明らかにしていく。
(4)グジャラート地方の交易都市であるスーラトを中心として、外国商人、とくにヨーロッパ東インド会社との交易によって商工業がめざましく発展した。
(5)その経済発展を支えた在来のインド・商人グループの中で、とくに、パールスィー商人団の経済的活動が盛んであった。
(6)本研究の目的は、パールスィー集団が企業的活動を行い、企業を形成し、企業として成長、発展していった過程を実証的に明らかにすることにある。

３．研究の方法
(1)イギリス、ロンドンの British Library の OIOC で、India Office Records を調査し、史料内容を分析・研究調査した。
(2)当時の現地からの報告集をまとめた基本的な史料集である、Original Correspondence の中から、該当する当時の報告書を分析した。
(3)同じく、ロンドンの British Library でイギリス東インド会社のスーラト関係史料集 Surat Factory Records や、ボンベイ関係史料集 Bombay Public Proceedings を調査した。
(4)これらの資料は、第一に、イギリス東インド会社の現地からイギリス本国に送られてきた手紙類などの報告書である。
(5)英文によるこうした史料の中にムガル帝国中央政府から出された史料が含まれていることもある。
(6)こうしたイギリス東インド会社の英文の史料以外の史料を調査分析した。
(7)さらに、当時、イギリス人より早くにインドに来航したポルトガル人の史料集から在来インド商人に関わる史料を検討した。
(8)当時の西インド、スーラトにおいてイギリス東インド会社同様に、交易活動を行っていたインドオランダ東インド会社の関係史料を調査研究した。
(9)こうした史料の分析にあたっては、研究会を開き、史料に関する共同研究を開いて、その史料の分析を行った。
(10)研究会は、月一回程度行われ、出席者は

のちに掲げる共同研究の成果(「東インド会社に関するシャー・シュジャー名のニシャーン」)に挙がっている研究者、阿部尚史、杉山隆一、登利谷正人、と当該研究者によるものである。

４．研究成果

(1) 現代インド企業集団のうち、もっとも成功したパールスィーの経済活動が歴史的に明らかになるのはムガル時代からである。

(2)パールスィー集団は中世インドにおいてイランから移住し西インドに定着したが、パールスィー集団はナウサリーにおいて綿織物工業を営んだ。

(3)その製品の品質が高かったため、ヨーロッパ人に人気であり、ムガル時代中期以降、その商業活動や綿織物生産活動が広く知られるようになった。

(4)インドでは、パールスィーは、非常に人口数の少ない集団で、ゾロアスター教の教義を守り、かれらだけの集団を保ち続けてきた。

(5)パールスィー集団の代表がムガル帝国中央と直接に接触したのは、アクバル(在位1556－1605）になってからである。

(6)アクバル宮廷を訪れたパールスィーの宗教指導者はナウサリーの名士であり、アクバル名のファルマーン（勅令）によって、恩賞地（イナームまたはマダデ・マアーシュ）を与えられた。

(7) アクバルの勅令によってかれらの先祖伝来の土地保有が確認され、その後かれらに与えられた土地はムガル帝国の皇帝によって、その保有が確認された。

(8)パールスィー集団の使節はムガル帝国の皇帝のもとを訪れることによって名声を高め、商工業集団としての名声だけでなく、広く社会的に名声を上げた。

(9)ナウサリーはスーラト近郊にあってかれらの綿織物を主体とする商工業生産活動は有利な地位を占めていた。

(10)さらにスーラトにおける造船業では、パールスィーの職人はイギリス船のモデルにあわせ、正確に注文通りに製造した。

(11)スーラトの船舶所では船舶の修理、小型船、中型船の建造を行うことができ、市内にはパールスィーの技術者集団が居住していた。

(12)スーラト市内のパールスィー集団の中で、貿易商や卸売りを営むものが富裕層を代表していた。

(13)かれらは早くからヨーロッパ東インド会社に雇われ、「仲介業者」として働いていた。

(14)17世紀半ば富裕階層のパールスィー集団がスーラトの統治にも影響を与えるまでになったといわれている。

(15)スーラトにおけるパールスィー集団の経済活動がその後のかれらの大々的な経済発展の出発点をなしたのである。

(16)17世紀後半にかれらの一部は、ボンベイに経済活動の拠点を移していったが、移動後もスーラトでの活動拠点を完全に放棄したわけではなかった。

(17)17世紀から18世紀にかけて経済的に成功したパールスィー商人はルスタム・マネク（生没 c.1635－1719）である。

(18)ルスタムは聖職者の家系に属しており、はじめは決して豊かではなかったが、父の代から経済的地位が上昇していった。

(19)マネクに典型的にみられるように、成功したパールスィー商人は拠点をもち、そこを中核として、地元の社会と連携を保ち、経済活動を続けていった。

(20)従来の研究では、この点をみのがしており、かれらのような商人は拠点となる場所を持たず、単なる行商であったとしているが、それは重大な誤解である。

(21)マネクはスーラトの有力な名士であり、

社会的、経済的に地元に大きな貢献をなし、地元ヒンドゥー社会と密接な関係をもった。
(22)かれはヨーロッパ人とムガル宮廷との間の「仲介者」として、ポルトガル人、オランダ人、イギリス人との経済的結びつきを深めた。
(23)ルスタムは、後に、ボンベイでのパールスィーの経済発展の創始者として知られるようになる。
(24)ルスタムが、イギリス人のもとに「仲介業者」として雇われたことは、単なる仲介業のみを主たる職業とするものではない。
(25)イギリス東インド会社との契約では、ルスタムの役割は、現地インドの主要な商品を仕入れることであった。
(26)かれの商業活動は、スーラトを中心とした西インドさらには北インド、南インドまで至る広大な地域商業圏におよんでいた。
(27)ルスタムの活動はこうした広大な商業圏で商取引を動かす大商人であり、単なる「仲介業者」ではなかった。
(28)ヨーロッパ人が「ブローカー」または「仲介者」と呼ぶものは、当時のことばでは「ダッラールdallal」という。
(29)ヨーロッパ人は商品を仕入れるため都市の商人と接触を取り、この「仲介者」がそれぞれの商品を扱う中小の「仲介者」と交渉して商品を仕入れる。
(30)西インドで「仲介者」とは、小段階から何段階かにわたっており、ヨーロッパ東インド会社と契約する仲介者はふつうしっかりとした拠点を持つ大商人である。
(31)こうした「仲介者」に対して、取り扱う商品の価格によって、何パーセントかの手数料を払ったが、マネクのような「仲介業」を行う商人は決して拠点を持たない行商ではなかった。
(32)このようなパールスィー集団のうちから、やがて、イギリス支配下で、現代インドの企業集団で財閥を形成して成功したグループが生まれ、その一つがタタ・グループである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
1.
小名康之「17 世紀ムガル帝国時代のパールスィー商人」『青山史学』31 号　2013 年　1-18 頁　査読あり。
2.
小名康之(代表)「東インド会社に関するシャー・シュジャー名のニシャーン―17 世紀ムガル時代の公文書―」(共同)阿部尚文、杉山隆一、登利谷正人、『青山史学』31 号　2013 年 19-51 頁　査読あり。

〔図書〕（計１件）
1.
小名康之編
『文書行政の発達についての比較研究』
山川出版社、2012 年、iii, 236 p.

６．研究組織
(1)研究代表者
（研究代表）小名康之
研究者番号：60118718

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：